

なお邦訳されたウイルス学、免疫学などの学術用語は可成専門的なものであるが、正確な用語となっている。

著者は最後にウイルス感染症とその対応が人類の歴史に大きな影響をもたらしたことを述べ、続いて「人類の輝ける歴史は、戦争に勝ったことでもなく、王朝ができたことでもなく、また財閥帝国が築かれたことでもなく、人類の生活状況の向上にある。われわれの健康を侵すさまざまな病気を根絶することが文明の成功の王道であって、この責務を遂行する人びとこそ勇氣ある新しい世界への眞の航海者となろう。」と結んでいる。

この優れた著書を邦訳された二宮陸雄先生は、これまで多数の著書訳書を出しておられるが、最近では人類に最大の惨禍をもたらした天然痘に対する予防ワクチンである種痘法の普及に盡瘁したわが国における先覚的蘭方医(北条諒齋、桑田立齋ら)を紹介する著書(天然痘に挑む)平河出版社一九九七、「桑田立齋先生」桑田立齋先生顕彰会一九九八を著しておられる。二宮先生がこの著書の訳に取り組まれたのもオールドストーンが最後に述べているように天然痘が根絶され、いくつかのウイルス感染症も制御されつつあるが、その根絶や制御に向けて盡瘁した多くの先人のように、新たな人類の脅威となつてきているエイズなど多様な新興ウイルス感染症の制御に関心を抱き眞摯に取り組む研究者であることを期待してのことであろう。

(加藤 四郎)

(岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五―一五、電話〇三―一五二一

〇―四〇〇〇、発行一九九九年二月一六日、B5判、本文二七八頁、定価二、八〇〇円)

中村 桂子 著

### 『北里柴三郎』

本書には副題「破傷風菌論」があり、扉を開くと書名の上に「能動知性」1「生の場」とも付してあり、著者には「北里柴三郎・中村桂子」とある。哲学書房の意欲的な企画で始まる叢書第一期十巻の第一巻として昨年十二月に発刊されたものであり、この約百年間の日本の知性として次は呉秀三、その後寺田寅彦、西田幾多郎、夏目漱石、福沢諭吉等が予定されているとの事である。

中村氏は著名な生命科学者で、生命誌研究館副館長として著作その他種々活躍しておられる事は周知の事である。

先ず本書の特徴をあげる。

一 北里柴三郎(以下「北里」)についての評伝などは出版されているが、北里学派とも言うべき北里関係の医師以外の自然科学者の執筆は最初であり、評伝の他に微生物学の発展や日本の科学と社会との関係など種々提言も述べている。

二 続いて「北里」の「破傷風菌論」としてドイツでの業績など主な日本での演説などの全文の他欧文も含め発表論文、著書、文献などが詳細に紹介されており、続いて順天堂大学医学部医史学研究室の月澤美代子氏による解説がある。

本書の内容は専門的な部分もあるが、北里及びその時代を現在の視点で考えるための今日唯一の手引書となっている。

右の一の特徴は「微生物の耕作者」と題した四六頁の随所に見られるのであるが、見出しは「生物は生物からしか生まれない」ではルイ・パストールの自然発生説否定にも触れ「微生物の狩人の時代」「公衆衛生の端緒をつかむ」「実験と研究たくみなアイデア」「血清中の抗毒素の発見」「第一回ノーベル賞を逸す」「北里の帰国」「脚気菌」批判」「伝染病研究所の設立、福沢諭吉の助力」「土壌微生物の出す抗菌作用物質」「病気の内因」「遺伝子の狩人」へ」でゲノム解析の現況に言及し「思いがけぬ細菌の逆襲」「微生物耕作者」へ——細菌を細菌として見る」となっており、ここでは細菌の自然誌をよく知り、活用すべきであると強調してある。

右の見出しに見られる様に、細菌学の勃興期から始まり、北里の活躍するコッホを中心とする研究の進展、日本の社会で北里の迎える状況、独創的な成果を日本から興すための日本の科学者社会の問題点などの提言がある。

著者は生命科学者の立場より微生物の流れと新しい方向を示され、微生物学は今日ゲノム解析が進んで広い活用が期待されている。また病原微生物学も発展しつつ臨床研究の基礎となり、一部は日常の検査等へ応用されて、科学は普及し人々利用されるのである。

北里の破傷風菌の純粋培養の成功が偉大な業績として評価されているが、この発見に至る実験経緯について、専門書以

外の評伝などではほとんど述べられていない。

筆者は田口文章教授(北里大衛生学部)と既に共著で紙上で述べている所であるが(日本醫事新報三八〇二号—三八〇四号)、北里は留学延期の直前に研究した破傷風菌より遙かに嫌気度の高い気腫疽菌を牛の感染より分離し固形培地での増殖に成功し(一八九〇独文、表題は二八五頁)、続いて破傷風菌を嫌気性培養により観察している事は、北里が当時の困難な破傷風菌の純粋培養の研究を短期間で成功させた経過がよく理解し易いのである。

本書の第二部にあたる北里柴三郎「破傷風菌論」には九編が掲載されており(二〇〇頁)「破傷風菌論」として「破傷風病毒菌及其デモンストラチオン」「ペスト」では「ペスト病調査復命書」「ペスト病の原因取調に就て」「免疫と血清療法」では「免疫試験結果の報告」「虎列刺病血清療法に就て」「論争」では「緒方氏の脚気バチレン説を読む」「与森林太郎書」「医学博士中濱東一郎君に答う」「啓蒙」では「細菌学大意」が多数の論説から選ばれている。この中でもとくに「免疫と血清療法」として「免疫試験結果の報告」と「虎列刺病血清療法」の長文二編が掲載されているが、ドイツより帰国後三年目の講演であり、一般向けの出版では最初のものとなっている。

巻末には一八四七年より約百年間の年表があり、北里の生涯・微生物を中心に関連の医学・生理学・生物学の進展、日欧の文化の推移が対比してあり、医科学史の時代の断面をそれぞれの項目のみに終らず読者の便に若干の解説を付してい

る。さらにこの年表を立体的に「時の胚種」の発想を中心に  
して種々の幾何学的図形にそつて展開する一枚の年表を組  
み、北里柴三郎のトポグラフィとして説明している。一つ  
の試みとして着想は興味深い。

最後に、北里の東京医学校に入学後の成績であるが、「同級  
生が順次落伍して三、四年の間に半減したにも拘らず、常に  
級の中以下に下がらなかった」(北里柴三郎伝、昭七北里研究所  
発行)と言われ、本書に出ている「あまり成績も芳しくなく  
……」の事実は当時の資料にも見られないところであり、ま  
た巻末に文献として出ている村上陽一郎氏の著書の中でも  
「あまり成績のよくなかった彼は……」とあるので弁護しておき  
たい。

なお本書に掲載されている写真等は電顕写真も含まれ、多  
種類で読者の興味をそそるものとなっている。

(会田 恵)

〔哲学書房 東京都千代田区神田駿河台二一三一―一六〇六、電話  
〇三―二三三三―一〇五〇、一九九九年十二月、A5判、二八六  
頁、二、五〇〇円〕

### 正誤表

第四十六巻第四号に誤植がありましたので訂正致します。

(編集部)

五五五頁十一行目……常に↓畜に  
五六二頁注(24)……Die gdee → Die Idee

### 編集後記

当四十七巻一号は新世紀最初の本誌とな  
る。十九世紀に先学の築いた本学会が、二  
十世紀の百年を越えて発展し、さらに二十一世紀を迎えるこ  
とができた。これを象徴する当号を会員諸氏にお届けできる  
ことは、誠にご同慶のいたりとし上げたい▼ところが、以  
上は奥付だけの話になってしまった。本来は昨年十二月二十  
日付発行の前号が遅延し、本年一月漸く会員諸氏のお手許に  
届いたからである。それゆえ実際にした新世紀初の本誌は、  
奥付が齟齬する前号となつてしまった。印刷・製本が年末の  
多忙期に重なつたためだが、それは恒例のことであり、弁解  
の余地もない。ここに深くお詫びいたし、ご寛容をお願いす  
る次第である▼さて当号には原著四報・研究ノート二報のほ  
か、資料・記事・書籍紹介と、盛り沢山を掲載することがで  
きた。ただし次号送りとせざるを得なかつた原著・研究ノ  
トもある▼ご存知のように、本誌の刊行には科研費の補助金  
を受けており、年間の総ページ数がかなり厳格に規定されて  
いる。このため各号のページ数が制限され、審査を経て受理  
された論文でも、時には掲載できない場合が生じてしまう。  
受理された論文のうち、投稿の早い順に掲載してはいるが、  
やはり次号送りは遺憾というしかない▼しかも投稿論文は近  
年、増加傾向にある。これは学会全体の発展の指標でもあり、  
本来は歓迎すべき現象なのに、悩ましい問題になってしまつ  
た。なんとか良い方向に解決すべく方策を検討したいので、  
ご理解とご猶予をお願い申し上げます。

(真柳 誠)